

特別号

ブラウンフィールド会議 2006

お疲れ様です。環境メルマの佐藤です。只今、マサチューセッツ州のボストンにおります。昨年引き続き、環境メルマは米国ブラウンフィールド会議に参加し、米国をはじめ欧州のブラウンフィールド関係者とお話することができました。今週は、写真とともに会議の様をお伝えいたします。



会議が開催されたボストン コンベンション&エキジビション センター。これはグリーンビルディング（環境配慮型の建築物）だそうです。

http://www.massconvention.com/bcec_dir_2.html



今年で第 11 回目を迎えた米国ブラウンフィールド会議。事前登録者数は 6000 人を超えていました。



会場のいたるところで見かけたサイン。この会議を環境配慮型にしていこう！と参加者へ呼びかけています。昨年と比べて印刷された配布資料の量がグッと減っていたのには驚きました。ごみのリサイクルには別途業者を雇ったそうです。



展示場。ブラウンフィールド関連会社（200社以上）がブースを設置し、会社案内をしています。



展示場の一角には、米国環境保護庁（USEPA）が地域毎にブースを設置しており、ソファなんかおいちゃってアドバイスやカウンセリングを実施しています。ブラウンフィールド関係者にとっては、直接 EPA 担当者とお話ができるいいチャンスなのです。



教育セッションの様子。これは USEPA ブラウンフィールド助成金についての説明会でした。お部屋がびっしり埋め尽くされ、地方行政のブラウンフィールド担当者や NPO は、USEPA と積極的に質問、意見交換を行っておりました。

電話や Email が発達した今となっても、やはり直接担当者の顔を見てお話をしたい！そう思っている方が多いのだと感じます。多種多様な関係者が協力してこそ成功するブラウンフィールド再開発。このような会議を開催する USEPA と ICMA の努力には本当に感心します。

まだまだお伝えしたいことは山ほどありますが、今週はこの辺で。

Thanks God It's Friday!
Thanks God It's Brownfield!!
佐藤

坂野のつけたし

昨年デンバー会議で感じた高揚感も落ち着き、あらためてブラウンフィールドとはなんだろうかと考えさせられた 3 日間でした。土壤汚染地の土地取引でほぼ必須となった AAI と呼ばれる評価手続きはちょうど 1 年前の昨年 11 月にスタートし、今年 11 月までの移行期間を経て、まさしくいまギアがトップに入った状況にあります。この仕組みがどのように使われ、また、新たな問題として何が発生するのか？予想される障害については、すでに議論が始まっています。汚染のある土地を将来にわたってどのように管理するのか？このメルマでも何回か取り上げてきた Institutional Control が、一番の問題でしょう。

アメリカではブラウンフィールド問題は、一つの山場を越えて、新たな展開に入ったように感じます。

©2006 株式会社イー・アール・エス 環境メルマ